

## イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）(2)

工藤 康弘・田島 篤史 訳

はじめに

本稿はイエルク・ヴィクラム（Jörg Wickram）の『少年の鑑』（*Der jungen Knaben Spiegel*, 1554）本文第三章および第四章の翻訳である<sup>1</sup>。本稿の二人の共訳者は「大阪初期新高ドイツ語研究会」を発足させ、2014年3月より活動を始めている。本稿はその成果の一部であり、すでに本作『少年の鑑』のタイトルページ、献辞、本文第一章および第二章と作品・作者の解説は別紙にて発表しているため、関心を持たれた読者諸賢はそちらを参照していただければ幸いである<sup>2</sup>。

翻訳にあたり底本としてハンス＝ゲルト・ロロフ（Hans-Gert Roloff）の編纂によるヴィクラム全集を用いた<sup>3</sup>。またゲルトルート・ファウト（Gertrud Fauth）およびミヒヤエル・ホルツィンガー（Michael Holzinger）による二冊の校訂版も参照した<sup>4</sup>。前者はヴィクラム研究の第一人者による校訂版であり、前書きと後書きにヴィクラムおよびその作品の詳細な解説が付されている。後者は1903年のヨハンネス・ボルテ（Johannes

---

1 Wickram, Jörg: *Der jungen Knaben Spiegel*, Straßburg: Frölich, 1554.

2 工藤康弘・田島篤史訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）」、『関西大学西洋史論叢』第17号、関西大学大学院文学研究科史学専攻西洋史専修、2014年、20-32ページ。

3 Wickram, Georg: *Sämtliche Werke, Bd. 3: Knaben Spiegel; Dialog vom ungerathenen Sohn*. In: Roloff, Hans-Gert (Hrsg.), Berlin: W. de Gruyter, 1968, S.1-121.

4 Wickram, Jörg (Verfasser), Gertrud Fauth (Hrsg.): *Der Jungen Knaben Spiegel; Mit dem Dialog: Eine Warhaffige History von einem ungerathenen Son.*, Straßburg: Karl J. Trübner, 1917; Wickram, Georg (Verfasser), Michael Holzinger (Hrsg.): *Der jungen Knaben Spiegel*, Berlin: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013.

Bolte) による一連のヴィクラム作品の校訂版を、ホルツィンガーが作品ごとに廉価なペーパーバック版で復刻したものである。このホルツィンガー版はコンパクトで参照しやすい反面、原典に収められている木版挿絵の一切が省かれているため、作品の臨場感といった点ではやや物足りなさを感じる。以上に加えてバイエルン州立図書館所蔵の初版テキストがオンライン公開されているため、そちらも適宜参照した<sup>5</sup>。

なお原典には章番号もコマやピリオドや段落の切れ目もない。ファウト版およびホルツィンガー版は独自に章番号を付し、文章を区切り段落分けをしている。本稿ではこれら二版の章番号に従いつつも、文章の区切りと改行は独自に行った。また本稿中に挿入している挿絵はファウト版の該当箇所をそれぞれの典拠としている。本稿の続章については媒体をかえて随時発表する予定である。

以下参考までに、既発表箇所のあらすじを記しておく。

### これまでのあらすじ

プロイセンの騎士ゴットリーブが騎士団長のはからいで、献酌侍従の未亡人コンコルディアと結婚した。二人は長らく子宝に恵まれなかった。一方、ゴットリーブの領地に農夫ルードルフとその妻パトリクスがいた。ゴットリーブは二人のあいだに生まれた男の子の代父となった。子の名前はフリートベルトという。一年後、ゴットリーブとコンコルディアのあいだにもようやく男の子が生まれた。彼の名はヴィルバルトという。

時が過ぎ、七歳となった農夫の息子フリートベルトは徳や技芸を身に付けたりっばな少年になっていた。かたや騎士の息子で六歳のヴィルバルトは甘やかされて育ち、悪友に染まったがために、無知でがさつな少年になっていた。

---

5 <http://daten.digital-sammlungen.de/~db/bsb00008420/images/> (2015年1月15日アクセス)。

### 第三章

二人の少年が学校へ行き、農夫の息子フリートベルトが  
ヴィルバルトよりずっと勉強ができたこと。



さて子供たちが騎士と奥方の大きな愛情のもとで育てられ、服や他のものもきちんと思いやりをもって同じものを与えられ、少年フリートベルトが今や七歳、騎士の息子ヴィルバルトが六歳になったとき、騎士ゴットリーブは子供たちを学校へ行かせたり、他の技芸を習わせたいと思いました。そこでこのことについて妻と親しく相談し、ただちに二人はこれを実行しようと決めました。

騎士は、子供たちを学校へ連れていってくれて、二人に一生懸命目を配ってくれるような誠実で育ちのいい少年を探し、二人のもりやく傳役として雇いました。そして彼にはとても念入りに服や本や、その他必要なものをすべて与えました。この善良な少年は熱心に子供たちを受け入れ、彼らが荒っぽいやり方ではなく、やさしく教えを受けられるようにしました。

果たしてこのことは二人の子供たちにとって効果てきめんでした。というのも、短いあいだに彼らは与えられたものを読み、書くことができるようになったからです。とりわけフリートベルトは先生と傳役がいくら驚嘆しても足りないほど、とても熱心に勉強しました。そこで彼の

傅役は、少年の頭がおかしくならないように、何か勉強以外にも目を向けさせようと思いました。ときおり傅役は彼らを楽しい緑の草原に連れ出しました。あるときは植物の生い茂ったきれいな庭へ、またあるときは緑深い森へ連れ出し、鳥の歌声で少年たちの気持ちをなごませたのでした。というのも、とりわけ天分に恵まれた繊細な人間の場合、あまりにもがむしゃらに勉強させれば憂うつになったり、他の重い発作を引き起こすだけだということを、傅役はわかっていたからです。

ヴィルバルトとフリートベルト、それに同じ年頃の他の少年たちが傅役といっしょに散歩をするときは、フリートベルトがいつも一番やさしく、落ち着いていてまじめでした。彼はこまやビー玉で遊ぶような子供じみたことにはあまり関わらず、花々や他のかわいらしい草のような美しい自然の植物に楽しみを求めました。そしていつも夢中になってそれらの形や美しさを眺めて観察していました。フリートベルトは子供としての理解力が及ぶ限り、あれやこれや自然のものについて傅役に尋ね、さらには本当の名前で呼ぶために、それぞれ固有の名前をラテン語で覚えようと思いました。傅役がその名前を言うと、フリートベルトはすぐさま書き板を取りだし、一つ一つ熱心に書き留めました。

一方、フリートベルトの義兄弟ともいえるヴィルバルトはまったく逆で、自分といっしょに無作法にうろつきまわり、こちらでは殴り合い、あちらではつかみ合いをするような悪友を求め、勉強のことなどほとんど眼中になく、時が経てば経つほどやらなくなっていきました。

これには傅役も不愉快に思い、折に触れてやさしい言葉ながらヴィルバルトを叱って言いました。「ヴィルバルトよ、どうやったらお前はお兄さんとこんなにも違う生活ができるんだ。フリートベルトが若者らしく、あのように上品で賢く振る舞っているのはあっぱれで、彼にふさわしいということがお前にもわかるだろう。ああ、彼を見倣い、彼が喜びと楽しみを求めるものに倣って自分を取り戻せ。そして徳を行わずに狼藉の限りを尽くしている粗野で無作法な若者のあとにはついていくな。あの連中が年長者を嘲笑し、軽蔑し、たしなみも、畏敬の念も、恥じらいもすべて尊重しないのをお前は知っているだろう。

さてヴィルバルトよ、この男はお前と血のつながりはまったくないが、お前のお父上とお母上が自分の子供として受け入れ、お前と同じように

育てられたのだ。高貴な親から生まれたかのように、貴族を範としている。彼は技芸と知識を得られるような人たちと付き合い、お前が慣れ親しんでいるような教養のない連中とつるむことはない。お父上とお母上は現状をたいへん憂慮されているぞ。お前はご両親の実の子で、高貴な生まれで、受け入れたお前の兄とともに、同じ熱意で育てられた。しかるに彼に比べてお前にはしつけても叱っても効き目が無いということが、お父上やお母上の心にどんな重荷となっているか、考えたことがあるか。というのも、お兄さんはすべてにおいてお前をはるかにしのいでいるからだ。彼は分別を増し、徳、技芸、勉強すべてにいそしんでいる。彼は敬虔で従順で、それでいて朗らかだ。お前も彼を見倣い、徳や勉強などみな嫌っている他の仲間には近づくな。」

こうした似た言葉が何度となく若いヴィルバルトに向けられましたが、まったく効き目がありませんでした。そしてそのような警告や説教はいつも、今の時代甘やかされた息子たちの習慣になっているように、一方の耳から入り、もう一方から出ていくのです。そういうわけで傅役がきつく叱ろうとすると、ヴィルバルトはすぐ母親のもとへ走っていき、苦しみを訴えたのでした。母親はすぐさま傅役のフェーリクス（彼はそう呼ばれていました）のところへやってきて、少年の愚かさを大目に見てほしい、なんといっても彼はまだ子供だし、おまけに博士にするために彼を学校へやったわけではなく、他の同じような少年といっしょに楽しみ、喜び、気晴らしを味わうためなのだと思願するのです。一人息子のヴィルバルトは多くを探究して知る必要はない。というのも彼は父親の家にとどまることになっているし、非常に多くの財産を期待できるのだから。だから彼を叱って悲しませないでほしい、と。それで善良なフェーリクスはこの件をそのままにし、これ以上口を出すまいと思いました。

このようなことは今でも私たちの学校で起こっています。たとえば父親と母親が学校の先生に子供をあずけます。先生は可能な限りの熱意を注ぎます。子供はわがままでしつけが悪い。腕白と無作法の限りを尽くします。そこで善良な先生は子供をこらしめようと思い、たとえば鞭でちよっとたたきます。子供はすぐさま走って行って、父親と母親に言いつけます。両親は激怒して先生のところへやってきて、ずうずうしくも

かみついで言います。ユダヤ人が私たちの主に鞭打ったように、先生は私たちの子供に鞭打ったと。ときには子供を学校から引き揚げさせて、次のように言います。子供は私たちだけできちんと罰することができます。それでうまくいくのです。というのも私たちの息子は今やもう頑固になっており、じっとしておらず、父親や母親のことなど何とも思っていない。放っておきます、と。さあ、もうこのくらいにして本題に戻りましょう。

#### 第四章

ある不良少年がヴィルバルトに彼の仲間である  
フリートベルトとすっかり仲違いするよう仕向けたこと、  
またその少年にヴィルバルトが執着したこと。



ヴィルバルトはじきに母から授けられた頑固さを心に抱くようになり、傅役と先生の罰や忠告はもはやほとんど心に留めてはいませんでした。そのためほかの不良少年たちとますますつるむようになりました。そうしてヴィルバルトの仲間のフリートベルトはとても不満に思い、あえてこの不良たち、とりわけほかのどの少年よりもすべての悪さにおいて手なれて、長けていたロタールという名の肉屋の息子から距離を置くようになったのです。そこでフリートベルトは、彼の弟であり仲間でもあるヴィルバルトがこのしつけの悪い輩といっしょにいるのを見なければならず、このたいへんな不満のあまりフリートベルトの体から思いやりが消えていきました。さてロタールは粗野で高慢な少年でした。嘘をついたり、欺いたり、つまみ食いしたり、盗みをはたらいたり、そしてなんでも手当たり次第することで、ロタールはすべての「善きこと」にいそしみ、いつも博打をしていました。

ある日フリートベルトは、今では十歳になった仲間のヴィルバルトが、ある居酒屋でロタールのもとでつまみ食いし博打をしているのを見つけました。十一歳となり、とても賢明で分別のある若者となっていたフリートベルトは、ロタールをなじりはじめると、次のように言いました。「ロタールよ、君の名前はよく知れわたっているよ。君は僕や僕の愛する弟、そして仲間たちを放蕩に引きずり込もうとしているが、君のばかばかしい無鉄砲さやたるんだ生活はいつ終わるんだ。君は善いことをする気がないのか。ああ、僕の愛する弟を甘やかしたり、誘惑したりしないでくれ。言うておくが、君が悪さをほどほどにしないのなら、僕はこのことすべてを父上と母上に申し上げるつもりだ。そうすれば君は二人からしかるべき報いを受けるだろう。」

甘やかされた高慢な若者ロタールは、フリートベルトよりもいくぶんか屈強で力強い体つきをしていましたが、突然フリートベルトに向かって立ち上がり、そして言いました。「おい、甘やかされた農夫の息子。お前のおやじのことはみんなよく知ってるぞ。お前は自分のことを騎士の息子になぞらえようとしている。お前は神さまのご意志でゴットリーブさまに拾われたんだ。それが今では彼の息子と名乗ったり、書こうとしている。おやじがいるその莊園へ行っちまいな。肥やしや干し草用の熊手を持ったおやじを見られるだろうよ。それがお前のおやじの騎士と

しての武器だ。いつもそれでもって騎士の仕事にいそしんでいるのさ。ほかの貴族のだれ一人としてお前のおやじに誉め称えられることはないさ。お前がおやじに似ているようなら、騎士の息子と名乗るようなことは、このうえなくお似合いなのさ。おれも言うておくぞ。今してくれたように、これ以上おれのことをそんな言葉でどなりつけるようなら、痛い目にあわせてやる。いいか、でしゃばるな！」

善良な若者フリートベルトは、高慢なロタールから自分の父親の卑しい出自をあんなにもひどくののしられたのを聞いて、大きな悲しみに包まれました。しかしフリートベルトはこれまで一度たりとも父の出自を偽ったことなどなかったのです。彼は涙を流し、うやうやしい声で話し始めました。「ああ、親愛なるロタールよ、僕はこれまで一度たりとも自分の貧しさを恥じたことなどないし、高貴であるとののしられたこともない。だから僕は我が愛する主人を父上と、そしてその奥方を母上と呼ぶが、生みの親をさげすむ気持ちからそうしたわけではない。また君が僕のうちに認めているように、そんなふうにうぬぼれたことはない。(すべての人が僕にほどこしてくれた善き行いに対して、とくに僕のことをとてもりっぱに愛情を込めて育ててくれた父上と母上に報いることができるよう、神さまどうか僕にお慈悲をお与えください。) だけど、まるで僕がほかの出自を自慢したり、皆からそう思われたり、またあからさまにそう見なされているように、僕の出自が不相応だと考える君たちは、それが不当だとじきにわかるだろうさ。」

このように言うと、フリートベルトはとても悲しげにその場から立ち去り、こういう場合どのように振る舞おうかあれこれ考えました。結局フリートベルトは自分の主人とその妻には円満に暇を乞うて、この先別の地で自分の平安を探すことに決めました。しかしまずは傳役に、このことについて助言を求めました。フリートベルトはその助言にすぐさま従うつもりでいました。

さてフリートベルトが仲間のヴィルバルトとロタールのもとを去ったとき、その不埒で悪たれの若者ロタールが騎士の息子ヴィルバルトと話し始めました。「高貴なヴィルバルトよ、おれがお前さんのうっとうしい義兄弟を、勇敢な言葉といかめしい態度で追い立て、追っ払ってやったことに対して、お前さんは何をくれるんだい。ほんとうにおれの言葉



を信じなきゃならんぞ。もしお前さんがあの農夫の息子の言いなりになっていたら、永遠にあいつから逃れられないぞ。このことは誉められたことじゃない。というもお前さんはあと二、三年のうちに取りついで若くて男らしい貴族になり、皆から注目されるだろうから。高貴さと生まれのゆえに、あの農夫の息子には考えられないような地位に就く。このことはよくわかっているだろう。あの傅役がお前さんにとても厳しくするのを、お父上とお母上が快く思っていないことを知っているだろう。おれ自身お前さんのことをよくわかっているが、お前さんから財産や富や名声が消え失せることはない。元気だせよ！おれはいつでも味方だ。お前さんに危害を加えるやつは、その前におれを侮辱したことになる。おれたち二人が大人になったら、お前さんの家来になってやるよ。そしてお前さんが命じ、求め、促すことをただちに行おう。おれはすでに仕える身になった。おれにしてほしいことを、今すぐ求め、命じてくれ。おれは心から仕えるぞ。あの農夫の息子があえてそうしたように、おれはお前さんと同じ兄弟でいたいとは思わない。むしろ今もこれからも雇われの召使いでいたいんだ。信じてほしい。」こう言って悪たれは言葉を結びました。

このまわりが見えていない若い貴族は、このことが自分にとって大きな損失になるであろうことを理解していませんでした。そしてこのロタールが約束したことを、ことのほか気に入ったのでした。というのも、すべての若者たちは自分の背後に財産や富があるのを知ると、いつもそうなりがちなように、ヴィルバルトも自分がすでに青年貴族であると思いが上がっていたからです。そこでヴィルバルトはこの日からフリートベルトにえらく反抗し始めたのでした。フリートベルトはヴィルバルトがこのようにし始めたことがまったく気に入りませんでした。そして少なからず不満に思い、憂えたので、フリートベルトはもはや楽しそうには見えませんでした。

二人の傅役はこのことをはっきりと見てとり、フリートベルトに彼の愛する仲間ヴィルバルトとのあいだで何が起こったかをすべて自分に教えてくれと言いました。フェーリクスという名のその傅役はフリートベルトに次のように言いました。「私の愛するフリートベルトよ、君は仲間のそのような分別のなさに腹を立てなくていいし、ロタールの悪しき

行いも気にしなくていいんだよ。私は長いあいだ君の仲間のヴィルバルトが善く正しい道を歩むよう努めてきたんだが、彼の母君がヴィルバルトに対して持っている愛情が次のような形で現れた。あるとき私が愛情と徳をもってヴィルバルトを叱ると、彼はすぐさまそのことを母君に言いつけた。一般に母親が、ひ弱に育てたわが子を愛するように、ヴィルバルトの母君も息子をきつく叱りつけるのを許そうとしなかった。そしてヴィルバルトにそのようなことをしないでほしいと、やさしいことばで私に懇願した。それゆえ私は母君に従い、そのような場合には言葉と行動で罰することを控えたんだ。このことは君にもできるだろう、私の愛しきフリートベルトよ。君にとって役立つことを考え、悪い仲間に加わることはやめなさい。自分の勉強にいそしみなさい。そうすれば卑しい出自にかかわらず、君はいずれ高みに来られるよ。」

これに対してフリートベルトは答えました。「そう、僕は愛する仲間が悪いやつらを通じて墮落するのを見なくちゃならないなら、僕の父の貧しい家で育った他の兄弟姉妹と違って、ヴィルバルトの父上の机でもに学び、幼い日々を過ごしたことをいつも悔やむにちがいない。そんな恵まれた暮らしを知らずに、今もこれからも貧しいままであったらよかったんだが。だけど、僕は愛する仲間が墮落していくさまを見る前に、ああ、愛するご主人さまとその奥方のもとを去って、僕のことも誰も知らないところへ行こう。」目に涙を浮かべて、フリートベルトは話を終えました。

口元にほほえみを浮かべて、傳役のフェーリクスは言いました。「誠実なフリートベルトよ、そんなに深刻になるな。また君の父君や母君、ご主人とその奥方のもとを去ろうなんて考えなくていいんだよ。君が歩んできた初めの良い経歴を、どうすれば続けられるのかということをもっとよく考えなさい。君はヴィルバルトに優るほどよく勉強した。だからあと一年ないし二年辛抱してほしい。もし私が生きていたら、君の心が渴望する方へ君とともに行こう。慎重にことにあたって、われわれがご主人と円満に別れるならば、私も君もいくらかは賞賛されるだろう。もし君が別れや暇乞いもなしにひそかに去ったとしたらたいへんだ。君は見知らぬ土地では、君自身よりもわれわれのご主人に助けられることだろう。私は、君がご主人に従うかぎり、彼が決して手を差しのべない

ことなどないことを知っている。しかしそれでもなお、いつもご主人と奥方のもとにいるように努めなさい。そうすればご主人も奥方も君に対して嫌がらせをしないだろう。もしほんのわずかな実直さの閃きがヴィルバルトのもとで輝いているなら、それは丹念に護りぬくことでいつか善い火となって燃え上がるだろう。そうすればヴィルバルトも、ロタールがさまざまな悪しき行いに満ちていることに気づくだろうし、最後には彼の悪事を嫌うだろうさ。その結果、再びたしなみや恥を知る心をも身につけてくれるだろう。だってまじめな心というのは、恥じらいを求めるものだから。そういうことで、フリートベルトよ、もう少しのあいだだけ辛抱しなさい。『待てば甘露の日和あり』っていうだろ。今回の不快な思いをしたことに対して、君にはなんの罪もないことを喜びなさい。どうあっても君に罪はない。」フェーリクスはこのように述べて、話を終えました。

フリートベルトは傳役と別れて、悲しい気持ちで遊歩庭園に行き、心を痛めながら弟とのいざこざについて考えました。長い時間がたち、今夕食の時間になり、フリートベルトはいつもどおりやって来て食卓の準備をし、とびきりの勤勉さと誠実さをもって自分の仕事をしました。彼の主人とその奥方が夕食を食べに来たとき、彼らは二人して息子のヴィルバルトの行方を探しました。しかしヴィルバルトはいませんでした。フリートベルトは、ロタールやその仲間たちのもとにいたヴィルバルトから一人で去ったこと、そしてそのときヴィルバルトをロタールのもとから連れてくることができなかったことを、深いため息をついて答えました。この言葉を聞いて騎士は大いに不愉快になりました。